はじめに

基本的にスペイン語の文法書は順序として直説法から入り、それを一通り学んだあとに接続法の学習が続きます。そのため接続法事始めといっても、一応直説法を学んできた人たちが対象となります。

その直説法といえば、世の中の出来事を「客観的に判断し伝達する」表現方法でした。ちょうどニュースを視聴者に読み上げるようなものです。私情を挟まずに物事を淡々と伝えるときに用いる方法です。また発話者が主観的な感情うんぬんよりも、確信および信念をよりどころに思いや考えを伝えるときにも用いられます。

しかし、私たちには「感情」があります。日常生活においていつも冷静に物事を見聞きして表現しているわけではありません。人や社会とかかわる以上、どうしても喜怒哀楽の情はついてまわりますし、不安や疑念を抱いたり、欲望に駆られたり、あるいは身近な人たちになんだかんだと言いたくなったりすることも多々あります。そういうときこそ接続法の出番がまわってくるのです。

確かに接続法はややこしいという理由から、手っとり早く機械的に覚えてしまうという方法もありますが、それですと直説法・接続法の用法の意味がわからずに、機械的にスペイン語とつき合うことになります。それでも、自分からスペイン語で表現するときは、接続法の知識に従って発話するなり文を作るなりする分にはさほど問題はないでしょう。しかし、他人の発話内容や通信文（手紙、メール、記録）あるいは文学作品などに表れる心情を前にしたとき、文脈から浮上してくる「細やかな感情の綾（あや）」をキャッチするとなると話はちがってきます。

本書の目的は、スペイン語の接続法がどのようなときに用いられるのか、できるだけ多くの例文を用いてわかりやすく説明し、それに関する練習問題を解くことで理解を深めてもらうことにあります。この基本的な仕組みが理解できれば、あとはさまざまな分野のスペイン語文に触れることによって接続法の知識は確実に深まっていきます。しかし、文法書の説明や文例だけで終わってしまうと、そこでストップしてしまいます。というの

も、古き時代から現代に至るまでのさまざまなジャンルの文書や、スペイン語圏の人たちのコミュニケーションから生まれる発話は無限にあり、繊細な感覚や感情を含むスペイン語接続法の表現は溢れかえっているからです。そのため、より研鑽を積む意味でも、文法書を学んだあとも多種多様なスペイン語に触れることが大切です。

本書では接続法を始めるにあたり、まずは「ウォーミングアップ」で接続法の構文がどのようなかたちで表れるかを説明します。続いて、本文では基礎固めとして「名詞節」を細分化し、それぞれの内容をできるだけ砕いて説明することから始めます。フランス語、イタリア語、ポルトガル語などのラテン系言語と同じように、接続法の基礎をきちんと理解することは、感情表現を学ぶうえでの基礎固めとなり、なおかつ何世紀ものあいだスペイン語圏の人たちが紡(つむ)いできた文章を正確に学びとるきっかけにもなるはずです。要するに、接続法が何であるかを理解したうえでスペイン語文に触れるということは、それだけ理解が深まり、表現が豊かになるということです。ただ、動詞の活用は直説法だけでも大変なのに、さらに接続法が加わればその分の活用まで覚えなきゃならないの、とため息が出そうになるのもわかります。しかし心配はご無用です。直説法の活用を理解していれば、接続法にもそれと似たようなルールがあるので、いざとなったら辞書を引いて活用を確認すれば問題ありません。

本書で扱う接続法は、スペイン語の中でも日本人から見ると、私たちの日本語にはない特殊な構文です。そのため、あえて感情や思考を分類し解説することにしました。もちろん、そうした分類のむずかしさは重々承知のうえです。例文については、できるだけ日常会話をイメージしながら作成し、なおかつ必要とあれば同じようなパターンの文を引き合いに出し、「直説法」と「接続法」の比較や、「単文」と「複文」の比較ができるよう試みました。

スペイン語文に付す日本語訳に関しては、次のように考えました。本書は文法書という体質から、どの例文も前後に文脈のない孤立した文ばかりです。そのためこれに日本語訳をつけるとなると、誤解を招かないためにも、従来どおりの逐語訳が一番無難のような気もしますが、実際にそのように訳してみると、かなり不自然な日本語ができてしまいます。両言語の

文法構造の違いから、一例をあげると、スペイン語では主語は省略できても、いたるところで人称代名詞や所有形容詞などが必要不可欠な語として顔を出します。一方、日本語ですが、元来こうした主語や代名詞などは、文全体の意味が伝わればできるだけ省略する傾向にあります。さらに場合によっては、辞書に載っている単語の日本語訳をそのまま使用すると、これまた妙な日本語になってしまうこともあります。こうしたちがいが訳出をむずかしくするのです。そこで、本書ではどうしても必要な場合を除き、逐語訳にはこだわらず、スペイン語文のイメージが伝わるような訳を心がけました。

ここまで本書の方針を述べてきましたが、そういう筆者自身、大学生のときのみならず、スペインやアメリカに留学していたとき、さらにはスペイン語を教え始めてからも、接続法は文法書にしたがい、多くの場合、機能的に理解していただけかもしれません。しかし、遅まきながら、接続法をどうすればうまく伝えられるかという課題に向き合えたことで、そのときの自分自身を読者の一人に加え、その自分を納得させられる内容になるよう心がけました。読者の皆様には、楽しみながらスペイン語接続法の正体を見極めていただければ嬉しいです。おそらく直説法を中心に考えてスペイン語を操っていたころとは、また別の視点から「感情の編み出す文章の綾（あや）」が見えてくるのではないでしょうか。

最後に、スペイン語のチェックに終始尽力を惜しまなかった Patricia Valdez Satake と、これまで同様に今回も楽しいイラストを快く提供してくださった誉田百合絵さんに心から感謝いたします。